

自 行 力



白いティーカップ

毎年のことながら12月も半ばを過ぎると、気持ちが焦り始める。少しは予定も立てなければと見慣れたカレンダーに目をやった。

「あらっ、今日は結婚記念日だった。四十年、いやもっとだね。まっ、今更どうでもいいか」

私は独り言をつぶやきながら、重い腰を上げて台所を片づけ始めた。

しばらくして、シンクの上の戸棚の奥にしわだらけの包装紙を見つけた。その包装紙に包まれた物を、踏み台の上で背伸びしながら取り出した。それからこわごわ開けると、出てきたものは、白いティーカップとソーサーだった。

「あーこれ、ずっと前に夫からもらったものだ。すっかり忘れてた」

踏み台に腰をおろすと、ティーカップを見つめながら、いつものボンヤリタイムに入ってしまった。

世間の女性はよくご主人や恋人からプレゼントされるらしい。

「これプレゼントよ」

友人や従妹が、うれしそうにそう言いながらバッグや靴やアクセサリーを見せてくれる。その度に、私は、ため息交じりに思うのだ。

(いいなあ、でもあの夫からはいらぬなあ。何しろベージュを薄茶色、アイボリーは白としか理解できないし、アクセサリーに至っては用途も分からない人だもんね)

夫は決してケチではなく、むしろ鷹揚な人だと思う。今まで私が買った物に嫌な顔をしたことはないし、値段を尋ねたこともない。だから勝手に自分で買う方が気が楽なのだ。考えてみれば、私は夫からプレゼントというものをもらったことがただの一度もなかった。いや、一度あった。結婚する前の和紙でできたポケットティッシュケースだ。

「いい柄ですね、どうもありがとう」

そういう私に困ったように答えた。

「いやあ、一緒に社員旅行に行った人にお土産くらいと、買わされたんだよ」

それからずっと、私は夫に誕生日や父の日(夫は私の父ではないのに)やバレンタインデーには必ずプレゼントをするけれど、私はもらったことがないのだ。

思い出すのはホワイトデーだ。夫が会社勤めをしていた頃、女子社員からもらったバレンタインデープレゼントのお返しを買うのが私の三月の仕事だった。

「申し訳ないけど、今年はこれだけを頼むな」

夫から受け取ったリストには、もらった人の名前と品物が書かれているだけだ。

(何歳ぐらいの方かなあ？これは一人で頂いたんだろうか？グループだったら同じ物にしないとね。お値段も見合ったものにしないと)

などと考えながら、デパートや雑貨屋をぐるぐる回り、あれこれと買い求める。ついでに娘の分も。それを、娘はお父さんからだと無邪気に喜んでいて。

「こんなのでもいいかなあ。お菓子と雑貨分けてあるよ」

そう言って、夫に可愛くラッピングされた包みを渡すと、

「あー助かった。いやもう何でもええんや。それよりこの習慣なんとかならんかなあ」

手提げの紙袋を、そのまま確かめもせずに会社へ持って行った。その時に、私にも何かという発想は全くないようだった。

ところが、二十年もっと前のある日のことだった。

「これ通販で買ったんやけど」

夫がそう言ってプレゼントしてくれたのが、このティーカップだった。私はただただポカンとして、お礼を言

うのも忘れていた。誕生日とかでもなくあまりにも突然だったからだ。

(一体何が起こったのだ)

そう思いながら、恐る恐る紅茶を入れてみた。すると、何の変哲もないカップの中で、紅茶がハートの形になっていくではないか。白いカップに澄んだ茶褐色のハートが映えてきれいでかわいい。

(どうしたんだろう。何かうしろめたいことでもあるんだろうか)

そう思ってきいてみた。

「どうしたん？急に」

「いや、なんかええなと思って」

「おしゃれやねえ。ありがとう」

そう言ったものの疑惑は一層深まった。食器戸棚の特等席に置いて二度くらい使っただろうか。

このカップが日の目を見るチャンスが一度あった。娘の友達が遊びに来て、紅茶を入れて出した。

「まあすてき！」

そういたく気に入ってもらえたので、差し上げたいと申し出た。

「とんでもないです。お父様の折角のプレゼント、いたくなんてできません」

そう丁寧に断られた。その後カップは、どんどん奥へ入れられ、ついには高い戸棚の奥で忘れられる運命になってしまったのだ。

(このカップ、可愛そうなことをしてしまったね。そうだ、結婚記念日ティーでも入れようかな。確かクッキーもあったよね)

そうまたひとり言を言いながら、踏み台から降りた。そして、お湯を沸かしながら、カップを丁寧に洗った。

キッチンにやわらかな香りが漂い、カップにハートがゆらめいた。

(あの時の疑惑はもう晴れたでしょ)

そうハートが尋ねたようで思わず笑ってしまった。

(そうね完全に。ただの気まぐれだったのよね、人騒がせな人)

私は、12月のやわらかな日差しと香りをゆったりと思う存分吸い込んだ。